

幼児の音楽教育

北村 恵子

1 幼児の音楽教育について

現在の保育者養成機関の音楽教育については、色々な論議がなされている。

リトミック、コダーイシステム、わらべうた、日本音楽など、色々な形で考えられ、工夫され、各々現場にどのように使われるべきか説いている。しかしなお現場では確としたものが掴み難く、保育者達は混乱して自信を持てずに毎日幼児と接している者が多いのはなぜだろうか。何をどのようにして教えていったらいいのか戸惑いつつ、何か確としたものをつかむため、種々様々な講習会に出て勉強するが、それは単に毎日の保育の種を覚えにいくのにすぎない感じがしないでもない。

ではなぜこうも現場の保育者の音楽に対する不安が大きいのか。

まず、現場の幼稚園、保育園での保育に携わっている者の姿を少々とらえてみたいと思う。

先頃、ある幼稚園の園長先生と、その園で働く短大卒2年目のM先生と私の3人で幼児教育についてのディスカッションをした中で、音楽教育のことに触れた時のことである。M先生は即座に、私はピアノが下手でとても困ります、とおっしゃった。私から見て、下手とはとても思えないし、音楽的な素晴らしい所がうかがえる先生なのに、疑問を持った私に返った答は、1日の保育の流れの中で音楽ほど大切なものはない。音楽にはじまり、音楽に終るので、色々な曲をピアノで上手に弾けないと、非常に大変である。ピアノの上手な先生が羨ましい。という主旨のものであった。

さてここで問題になるのは、ピアノが上手に弾けることは素晴らしい事であるが、だからといって必ずしも音楽能力や、音楽性が豊かな保育者とは限らないということと、1日の保育の中で音楽ほど大切なものはない、という考えの根底に、幼児達が音楽が好きだからやる、というのではなく、音楽を号令とか合図の道具にし、又生活習慣をつけさせるための歌にと、音楽で追いまわっているのではないだろうか。こういう歌を幼児は本当に好きなのだろうか。のびのびと自由に楽しんで歌うのだろうか。ピアノという道具を自由にあやつって幼児達を自分の思い通りに動かせる力があると、それは楽に違いない。自分の音楽性の不足もピアノ演奏技術でカバーできるし、1日の流れの中で音楽で幼児の集団が規律を保つのだから。ピアノの音量に負けじ、と大声で叫ぶように歌う幼児達に、音楽性豊かな情操が育つのだろうか。その上、保育者は、大きな声で元気よく歌いましょう、と輪をかけていうものだから、幼児達は顔を赤くしてどなって歌うクセがついている。こんな光景をなんと数多く見かけることだろうか。実際、幼稚園、保育園に行ってみると、ほとんどの保育室にピアノかオルガンが置いてあり、毎日それらの鳴らない日はないのではなかろうか。

保育者にとってピアノなどの演奏能力が不可欠要素であると現場でも一般社会でもずっと考えられて来たとし、保育者養成機関の音楽教師達の多くも、永年の間そう思ってきた。では本当にそんなにピアノ演奏技術は幼児達と音楽に触れ合っていくのに必要なものであろうか。ピアノが上手に弾けることがすなわち音楽的にすぐれている事になるのだろうか。

決してそんなことはない。むしろ、弾けるために、技術に頼って、うたうことを忘れている例が多い。うたうという肝心の音楽表現がピアノ演奏技術でカモフラージュされてしまう。この曲が鳴ったらこうする、静かな曲になったらおねむり、行進曲が鳴ったら部屋に入るなどの習慣づけの音楽は、音楽の本質からは外れているといわねばならない。

ピアノ演奏技術の巧みな者、即音楽にすぐれている者、という答は、考え直されなければならない。大きな声で、元気な声で、と保育者は歌う時にかく言いがちだけれど、このために幼児達の自然な発声や、素直な感受性がどんなに損われているか、又それがピアノという楽器の音量にも無関係ではないと思えてくるのである。歌をうたう時は無意識に、又条件反射的にピアノの伴奏をしてしまう悪いクセが保育者の身についてしまっている。これは保育者養成機関にもおおいに問題があるのである。

以上述べてきたことは、歌う、という時には現場ではいかにピアノ伴奏が付随し、又それがどんな害をもたらすか、についてであった。

歌うという事について、尚絅短大の佐藤氏は、「^{注1}うた」はだれにでもうたえるという気安さで、ことさら注意を払わない無関心さ、

- 1 番手近な、しかも大事な個性を持つ大切な楽器（声）としての意識のなさ、
- 喜びの時うたい、悲しみの時にもうたい、又美しいものに感動してうたうという感性表現の手段としての「うた」の経験が少ないこと
- 他人と声を溶け合せることによって1つの音響を創り出すことができ、そのひびきを身体でとらえながらうたうことは実に気持ちいいことなのだ、という体験がないこと、
- ことばの持つリズム的なおもしろさ、はやい、おそいの速度の変化による緊張感のゆれや、遊びを伴ったときの多種多様な表現の豊かさが「うた」にあることに気付かないでいること、などと、うたの本質軽視の原因を言っておられる。

確かに「うた」はその本人自身の本人しか表現できないかけがえのない音楽なのだという認識を皆が持つべきだと思う。したがってうたうという1番大切な原初にもあたるべき音楽の本質を考えずして、やたらにピアノ演奏技術に頼って音楽を押しつけることは避ける方向で考えられねばならない。

又、園全体の規律・統制を保つ上で、ピアノの上手に弾ける人は都合がいいものだから就職の時も有利な立場にある。ピアノが上手なため他の人よりも給料アップになったとか、歌がとても上手で、音楽全般にも配慮のいき届く人でもピアノ技術が少し劣ると就職試験では落ちてしまう例など、就職試験とピアノ演奏技術との関係は現在の所とても密接なものである。ピアノが上手に弾けることはとても素晴らしいことではあるが、あくまでもそれは音楽の本質を伝える1つの手段なだけで、他にも方法はいくつでもあるのではないだろうか。現在の保育者養成

機関で学生を指導する教師の間でも最近この事に気付きはじめ、その観点からピアノ教育が論じられるようになって来た。それ以前は、いかにしたら少ない時間でピアノを上手に弾かせられるのか、だけが論じられていたものだ。しかしまだ前者の論点を正確に感じとれる教師は、わずかしかないのは残念なことである。

2 一斉保育の音楽について

現場での一斉保育の音楽について考えてみる時、再度述べてみたい事は、大きな声で元気にうたいましょう。という保育者の問いかけについてである。この間違いはやめたいものである。幼児にとって大きな声はどなる声につながるし、元気な声でうたっても、それがその曲に合ったうたい方かどうかは疑問である。又、個人差もある。笑い方でも、ある人はワッハッハ、ある人はホホホ、ウフフフなど、様々な表現があるように、歌い方も様々なものである。声の小さい子もいれば、かすれた声の子もいる。高い音の出ない子、低い音の苦手な子などもある。曲から感じとれる力も、表現も異なる。このように色々な様相を示す幼児達を10把1束にして、大きな声、元気な声を出させる事に執着するよりも、1曲1曲の感じをとらえ、その子なりの曲の表現が出ればいいのであって、保育者の方から感じ方を押しつけてはいけな。感じとらせるように仕向けることである。そのために保育者は、ピアノの前にすわり込んで、ピアノの内フタに写った幼児達の様子をのぞき込んで判断するのではなく、顔を向けて幼児の状態をよく見なければわからない。楽譜に頼りすぎているから、楽譜がないとピアノが弾けない。さあ歌いましょう。と言ったきり、保育者は幼児の1人1人の反応におかまいなしに、楽譜とピアノにかじりついて、耳のうしろからきこえる幼児の全体の声をきいて、もっと元気に、大きな声で、とくる。

尚絅短大の佐藤氏も言っておられるが、だいたい、ピアノという楽器にもしフタをして1日中ピアノ伴奏なしの音楽をしてみたらどうだろうか。音楽がより音楽らしくなるのではなからうか。保育者の音楽性がピアノという楽器で邪魔されないのだから……。

この状態での幼児達の反応はいかにや、もし今日はどうしてピアノ弾かないの?といわれ、今日はピアノなしよと答え、ワーイ嬉しいな、というか、又ピアノあったほうがいいよ、ひいてよ、というか、どちらだろうか。たまにはギターや笛、ハーモニカ、木琴などの楽器を使い、ピアノなしの音楽だって必要なのではないか。幼稚園、保育園の現場では、この他にも不必要な音をのべつ幕無しに与えていすぎはしないか。

余計な音を整理しなければ本当の音がわからない。ピアノにフタをした1日を経験した時、保育者の音楽力が正しく発揮されるのではないだろうか。

さて次に合奏について述べてみよう。まず思い浮ぶのは誕生会、クリスマス会、音楽会、おゆうぎ会などで発表される合奏のことである。発表されたものを聞くと素晴らしいものも多いが、担任の保育者のカラーを強く感じるのである。皆で力を合せて楽しく合奏出来たことはいいのだけれど、中にはリズムだけは合っているも楽器のバランスを考えないものや、とに角曲が進むにつれて打つべき所で楽器を打てばそれで事足れりとするものなど、曲全体の美しさ、

その曲らしさを考えるよりも先に、いかにキチンと楽器を打たせるかに力を入れた発表が多いのである。

そのため、幼児の耳も、笛、木琴、メロディオン、ピアノ、オルガン、グロッケンなどのピッチの悪さも気にしないで、とに角リズムが合えばそれでいい、と、なりはしないだろうか。きいている大人側も、まあまあ小さいのによく合った、などと言っている。1つの音が皆で一緒に気持ち良く溶け合った感じを経験させることがすべての源になっていくのではないだろうか。溶け合う気持ち良さが人間生活の中で出て来た時それが音楽のはじまりであり、大切にしなければならぬものである。

あまり複雑な高度なことではなくて、もっと極く普通の自然界の音だとか、親の声とか、足音やスリッパの音とか、それらがころよく溶け合う気持ち良さから初まり、音楽でも簡単なものでいいからこの経験を是非土台にしてつみ上げて欲しいものである。

この引き継ぎが小学校へもいくのであるが、よく笛などでピッチが合わない気持ち悪い音を皆でピーピーなんの不思議も感じないで、ただ演奏出来ればいいと思ってやっている姿を多く見かける。むやみにリズムが合っていれば楽しい、だけで済まされない重要なものであると思うのだが……。

ピアノ演奏技術があり、それを号令や合図に使うより、音楽全般に配慮の行き届く保育者になる必要性が以上の例から見ても充分ある。

次に、幼児集団と保育者と音楽とのかかわりを考える時、保育者は集団のリーダーシップがなければならない。リーダーシップがとれないから手段にピアノを使うようでは困る。音楽リーダーとして集団の人間そのものを把握し、その人間を育てあげていくことが大切である。音楽は喜怒哀楽の感情を表現出来るものであるから、ユーモアあり、ペーススありの人間的な保育者が指導出来たら素晴らしい。指導というよりも幼児とかかわる時はその集団の音楽ガキ大將的な存在が保育者であり、ボスの座は、いい人が出て来たらゆずるよ、という姿勢が欲しい。そうでないと、指導するという考えの立場から、大人のカリキュラムで幼児をひきまわす危険が多い。

幼児から学ぶものはとても多い。幼児と一緒に遊べる保育者にならなければそれは望めないことである。

「音楽に教師はいらない。」とある有名な指揮者が言っているが、この人の幼少時、家族の中で音楽の存在は全く無視されていた。家中オンチという劣等感の中で、自分1人だけ音楽に興味を持ったが、家には木琴しか楽器がなかった。子供用の木琴には半音がないので、メロディをひいていくうちに、この音とこの音の間にもう1つ何かあるはずだ、と思ったのが、音楽に興味を持ち始める切っ掛けだったそうである。こんなふうに、自ら発見する力のある者は幸せであると言わねばならない。現在の状態では何もかも与えられ過ぎていて、それに振りまわされている感がする。この指揮者のように半音（黒鍵）に入ってゆけば、黒鍵恐怖症などというバカげた病気にならないで済んでいくに違いない。この病気は Cdur ならなんとか楽譜を見て弾けるが、黒鍵の入った調は恐怖なのである。この病人は保育者養成機関の学生の中に

はとても沢山いると考えられる。この事は、楽譜偏重の現在の日本の音楽教育に問題がある。ピアノも、楽譜を見ないで自分の思った通りの音が出せるようならしめたものである。ピアノは楽譜を見なければ弾けない楽器というわけでもないだろうから……。確かに現在のピアノ教育では、楽譜に頼りすぎている。ベートベンやショパンの曲を立派に弾きこなせても、さて同じその人が荒情の月を楽譜なしで伴奏をつけて弾きこなせるだろうか。ある大学の音楽の先生ですら出来ない人が現にいたのである。足が地についていないというか、ピアノという楽器に振りまわされているというか、楽譜偏重の重大欠点であると思う。

3 日本の音楽教育について

日本の音楽教育において、今までの音楽観による技術偏重の教育をのりこえることは、最大の問題である。この事について宮城教育大の鈴木氏は、^{注2}「音楽が、我われの相互伝達の手だての1つであることは、確かである。ことばを使ってしていることのある側面を、より強く、よりはっきりと伝達し合うことのできる手だてなのである。しかしことばを使ってと同様な音楽を使ってといういい方は、しっくりとしない感がある。これは、音楽が神秘化され、専門家に独占されてきたことになる。音楽が専門家の独占するところとなり、我われが、ひたすら受けるだけの消費者に成り下ったのはそう古いことではない。現在でも、人びとの相互伝達の手だてとして、1人ひとりが自由自在に使いこなしている民族はある。数百年前までは、それ程さかのぼらなくとも、しばらく前までは、音楽は、本当に使われていた。誰もが音楽で仲間に話しかけ、答えられていた。音楽が専門家の手に渡り、芸術とやらになり、その結果、必然的に商品化されるようになってから、我われが、音楽を使いこなすことができなくなるという不幸が始った。芸術ということばの概念が、現在我われの知っているようなものとなり、音楽がそういうものの1つとなったのは、音楽が、人びとの手から取り上げられ、専門家の手にわたってからである。音楽を、使いこなす道具として、我われ1人ひとりの手に取り戻さない限り音楽教育は、どんなに優れたものであれ、たんなる賢い消費者を作り出すことにしかない。そして、いい音楽を安く買い自分1人が楽しむのを、いい耳をもった人間と呼ぶようになってしまう。」と、現状の日本の音楽の危険性を述べておられる。音楽を文学に置きかえるならば、ことばが音で、ことばのつながりである話しがフレーズで、文学にあたるものが音楽である。だから、だれでもしゃべれる言葉があるように、音楽にもだれでもうたえるうたがある。わらべうたが、それではないだろうか。

わらべうたを日本の音楽教育の出発点にしようという考えは、この道に詳しい人の間ではもうかなり前から言われてきたことである。数年前に話題になった小泉文夫著「おたまじゃくし無用論」などは有名なものだが、この本は、楽譜無用論を説いているというより、現在の文部省指導要領の音楽対にする教育観について、違う角度から見直すべきだ、ということを述べているように思われる。日本民族は、民族としての音楽を失ないつつあるので、音楽教育では日本の音楽を基礎として世界の音楽を広く取り入れ、重音楽性を身につけることによって感受性を豊かにする教育を説いている。

しかし現在、文部省が日本音楽の重要性をボツボツ考え出しても、音楽教育観の発想の転換のないままでは、現場の混乱は目にみえている。現在の学校教育の音楽では、形が整いすぎて、1年毎に上の段階をねらうよう枠づけされた音楽では、いやいや音楽をしなければならないという場合が多い。形の高さに追いつけない子どもは、学校音楽は、学校へいってだけ勉強するものとし、家に帰れば全く違う種類の音楽を楽しんでいる。どちらがより自発的かといえ、後者であることは言うまでもない。私自身、学校での音楽は非常につまらなかった思い出がある。

ではここに「教わる側の発言」と題して、子供の言い分がのせてある音楽教育研究という本より、例としてあげてみよう。

青森県上北郡百石町立甲洋小学校6年 水尻節子^{注3} 音楽というのはなんのためにあるのだろう。ややこしくてむずかしい音楽のこれよりもかようきよくをまなんだほうがいいのではないのでしょうか。いちいち音楽の音ぶまた声のだし方、こんなことをやっている音楽よりも、自分の声をいかしてやる、かようきよくのほうをやったらいいと思います。むずかしいことはぬきにして、たのしむ音楽にしたらいいと思います。

青森県上北郡百石町立甲洋小学校6年 佐々木正生

ぼくは音楽はきらいです。それは音楽についての音ぶや記号などおぼえたり書いたりするのがめんどうだからです。

東京都北区立岩淵小学校6年 神山智行

外国では家族ぐるみで音楽を演奏しているが、日本ではそうやって楽しむ人たちは少ない。又、南方の赤道ちかくの国々の人々は、それなりの楽器を自然の中からつくりだし、儀式などの時に独特の演奏をする。やはり家族ぐるみではないが、村なら村、しゅ族ならしゅ族ぐるみで、長い習慣から得たものを合奏する。そういう人たちの音楽とぼくたちが考えている音楽はまた、ちがうんじゃないかな……。そういう音楽は、長い習慣から得たものをそのまま演奏しているのか、又自分たちで、それなりの楽しみを持って演奏しているのか、現地へ行ってみないとわからないけれど、ぼくたちが考えている音楽とはちがうことは確かで、確信できるものだろう。

長野県東筑摩郡四賀村立錦部小学校6年 太田安政

ぼくは音楽が苦手だ。音楽の時間に習ったことの大部分をわすれてしまう。ぼくだって音楽を、一しょうけん命やっているつもりだ。でもどういいうわけか忘れてしまう

東京都北区立神谷中学校1年 梅原タミ子

私は、今とつぜん、音楽と聞いて何を一番最初に思いうかべるかって言われたら、やっぱり最初は、とまどって、そして少したってから、歌謡曲って答えると思うんです。こんなことが最初に思いうかぶなんて、私は悪い人なんじゃないか。

東京都世田谷区立塚戸小学校6年 山賀博子

音楽のテストではふえをふいたり本のかいめいを読んだりするけれど、私はそういうテストはきらいです。つまらないです。たのしそうか、まじめにやっているかというテストのしかた

がいい。むかしてきにやらないでもっといいテストのしかたはないかな。かいめいはうまくよめない。テストで「はい読んでください」といわれても「あれおかしいな」といってつぎの人のぼんになってしまうのです。かいめいは読めないけれど音楽はとても好きだという人は、たくさんいると思うのです。ふえがふけないからかいめいがよめないからと音楽のテストばつ(X)というテストが多いが、いやだ。みんなのいけんをきいて、みんなできめた音楽のテストがいいと思う。

島根県邑智町立浜原小学校5年 天野 守

ぼくはあまり音楽がすきでないので、音楽の時間なるべく、うしろにすわってわるさをしてる。うたをうたっている時は、あくびがすぐでる。ふえをふく時は、わからないので、めちゃくちゃにふいている。音楽のうたは、きらいだけど、テレビで、かしゅのうたうたについてうたうのは、すきだ。

以上、問題のありそうな子のものをのせたので、もちろん音楽大好き、という子もいる。しかし大半の子は、学校での音楽と、家での音楽をはっきり区別している。音楽はややこしくてむずかしいもの(学校音楽)で、歌謡曲をうたうと叱られる。でも歌謡曲は好きだから絶対やめないぞ、という男の子もいた。

基礎学力をつけんがためにテスト、テストでいや気のさしている子供達。逃げ場はやはり歌謡曲やフォークなど、うるさく言われぬ所なのであり、興味を持った曲は、ギターで自発的に練習したりしている。何事も興味を持つことから始まるので学校音楽も、皆が楽しくなるような指導がなされなければならない。というより、文部省の指導要領が変わらないと、どうしようもないのかもしれない。

さて次にわらべうたについて述べてみたい。

わらべうたは、日本の言葉にちょっと抑揚をつけたようなものから始まるので、日本人が日本語をしゃべる限り、非常に密着した音楽だと言えるだろう。わらべうたを出発点とする考えは、日本人を自然に、無理のない音楽へ導入するものだといっても過言ではない。そこから出発して、わらべうたや日本の音楽にとどまるのではなく、西洋音楽も含めて世界の色々な音楽を受け入れ、幅広い音楽を自発的にとり入れようとする力や、感受性を豊かにすることが必要なのではないか。

日本人にとって、日本語は母国語であり、日本語で通し合えるという基盤に立っての上での外国語の理解が可能のように、音楽も日本人としての奥底でつながるものがあつた上での西洋音楽(いろいろの国の音楽)を感受出来るのではないだろうか。音楽が1人ひとりのことばとなるよう、又、そのことばでしゃべれるように、しかもそれが自発性に基ついた音楽であるよう、これからの日本の音楽教育では考えられなければならない。

宮城教育大の鈴木氏は、^{注4}「優れた、美しい……こういふことを、自分しかしないというところから考える人びともいる。しかし、誰もができる。誰もがうたえる、誰でもが参加できる、誰もがわかる、このことが、最も優れ、最も美しく、最も尊いものへの、不可欠な前提でなければならない筈である。と言っている。その導入口にわらべうたがあると考えられる。又

同じく宮城教育大の本間氏は、^{注5}「わらべうた」の問題は、大変重要な位置を占めているが、わらべうたといえはすぐに遊びからソルフェージュへ、といった図式で考えてしまうことはいささか問題がありそうに思う。そのわらべうたによる遊びが、前音楽的体験として成立する仕方を子供達の集団とのかかわりでとらえなおしてみることが必要ではないか。又その活動が音楽的活動の自由を子供の中に実現していくための、日本的様式の獲得と、どのようにかかわり合っているかを明らかにしていかなければならない。それはきわめて実践的な性格を持った問題になるのではないと思われる。と述べ、わらべうたについて研究の余地のあることを指摘している。又、島根大の永田氏は、^{注6}「ソルフェージュにおけるバイミュージカルの試み」と題して、

- 1 わらべうたを出発点とする……遊びは心の躍動と緊張を伴ない、表現は自由で生きたものになる。遊びこそ芸術教育に通ずる。音楽学習のもっとも基底的なものである。
 - 2 バイミュージカルの試み……日本音階と、西洋音階の段階的交互学習。
 - 1段階 となえことばから始まる。
 - 2段階 民謡のテトラコードのごく自然な発展として高音域に律のテトラコードがコンジャンクトした形ラドレミを扱う。
 - 3段階 始めに四種の日本音階の、それぞれディスジャンクト型とコンジャンクト型を扱う。
 - 4段階 わらべうたの実証例で、日本音階と西洋音階の結びつきがある。
- として4段階に分けて組み、又他国のペントニック、ヨーロッパの古い旋法も改めて見直し、古今東西の表現の多様性に、ソルフェージュ教育においても目を向けていく必要性を述べているが、導入口はやはりわらべうたなのである。色々な方法で日本の音楽を身近なものにし、日本人独特の音楽の良さを卒直に、恥かしがらずに認め直し、せめて自国の音楽を笑わない素地を、幼少時から身につけて育てて欲しいと願っているものである。

4 保育者養成機関の音楽教育

幼児教育者、保育者養成機関で学ぶ学生にとって、音楽はどのように受けとめられているのだろうか。まず毎日の勉強の中で1番大変で、多大なエネルギーを費やすピアノがあげられよう。このピアノも、ほとんどの養成機関では器楽という講座で行なわれているが、器楽とは、ピアノだけだろうか。器楽教育の中で、確かにピアノは大切だし、音楽の基礎学習に有効な楽器であることは言うまでもないのだが、器楽教育はピアノ教育だけでは決してないのである。ピアノ演奏技術の修得に汲々としている学生達の姿を見て、果してこれで音楽が好きになるだろうか、音楽することが楽しくて仕方ない、という学生が育つのだろうか疑問が湧いてくる。確かに現場ではピアノの弾ける人を要求している。これについては前に述べたが、要求するからといってホイホイとそれに応ずるだけが養成校なのだろうか。そんなことはないはず。音楽が好きだ、楽しいという感じの持てない学生達の多くは、ピアノ学習で受けた屈辱感、劣等感、不安感からそうなっていくと考えられる。授業の中でも、ピアノが上手というより、

指が器用に動くと、良い評価がされるし、音楽能力の面で、とても良い面を持った者でも指が思うように動かないばかりに悪い評価がされる。ピアノ技術の上手、下手、は、音楽性の良し悪しにはつながらないはずなのに。それよりも、指が多少動くことによって、かえって「うたう」ということを置き去りにしている者がいることは、重大な欠陥である。ピアノの良く弾ける者イコール良い保育者、弾けない者イコール悪い保育者、ピアノ演奏の能力イコール保育者の音楽力と考えられることは、誠にをもって残念だが、現状の幼児教育の音楽においてはこのような有様である。

ピアノ技術偏重の教育については、現在養成校の音楽関係者の間で論じられはじめているが、ピアノだって、もっと四角ばった考えを捨てて、楽譜をみなければ弾けないというような事でなく、幅広く考えてみたらどうだろうか。楽譜のドを中心にピアノの真ん中の位置から指を置いて始める、というより、もっと自由な考え方、例えば、握りこぶしで上音と下音をそっとたたいてみるとか、ペダルをふんで色々な音を出したり、黒鍵を存分に音としてとらえてみたり、まだまだ色々なことが考えられるではないか。楽譜に書いた1つの音から必ず始めるというメソッド的な導入法でなく、ピアノという楽器を全体的に考えるという発想の転換が必要になってくる。

ある日本の有名な音楽家の子供が「ネコふんじゃった」をひいていた。この曲は誰でも一度は弾いたことのある黒鍵ばかりで手を交替して弾く曲である。そこへその音楽家の友人が来て、その曲を半音ずつずらして、全部の調で弾いてやったそうである。その子はびっくりして、1つの曲でも、楽譜に頼らなくても色々な音から弾き始める事が出来る事を知ったそうである。楽譜に書かれた場所から始めるものと思っていた時のピアノと、もっと全体的に、全部の調で弾けることが理解出来た時のピアノでは、同じピアノでも、だいぶ違っている。楽譜だけに頼って弾くよりも全体的な大きなとらえ方をして欲しいものである。そして、自分を自分でピアノで語れるようになったら素晴らしい。こうなればピアノは苦痛な学習でもなんでもなくなるのではないだろうか。又、ピアノを通して、音楽する事が楽しくなるのではないだろうか。楽譜は全然いけないうことでも無論なく、再現して楽しむものであるのだけれど、楽譜というのは、演奏された音を残すために書かれたのが始まりであるから、自分で自分の音を出し、それを記譜していけたら、楽しくなっていく。

次に、養成校の教師の問題であるが、まず幼児のなんたるかを知らずして、自分が昔から受けて来た教育の押し受りを学生にしてはいないだろうか。机上の論理のみで何事も処理しているのではないだろうか。幼児と積極的に混わる努力をし、幼児の真の姿を知って、その上にたって、学生に与えるカリキュラムを考えて欲しい。カリキュラムを考える前にすべきことは、音楽をどう教えるか、ではなく、音楽をどうとらえるか考えることであり、幼児の持っているものをひき出していくための能力を養うべく、カリキュラムを立てて欲しいのである。養成校側と現場との密なる協力体制を作るために、教師は保育の現場にどんどん出掛けるべきである。又、むやみに現場の要求を受け入れるだけでなく、現場をリードしていく力も必要なのではないだろうか。

参考文献

- 注1 全日音研50年度研究紀要より
注2 注1に同じ //
- 注3 音楽教育研究 No.93より
注4 全日音研50年度研究紀要より
注5 音楽教育研究1976年冬号 No.6より
注6 //